

市川氏と、ワークショップに参加した先生たちの座談会

「気づく力」は鍛えられる？



ご参加くださった先生方

【埼玉県立小川高校】教頭・岡本敏明先生、教諭・山田翔一郎先生、教諭・江川麻未先生、教諭・花輪 恵先生、司書・新井直也先生、【埼玉県立久喜工業高校】教諭・坂庭千絵先生。

「Feel度Walk」で、体何が起こったのか。予定調和を抜け出し、感度を高め、「雑」を収集することで、どのように学びが始まるのか。生徒の好奇心を開くための関わり方について、語り合っていました。

花輪先生



普段なら言わない問いを、生徒がどんどん発したので驚きました。

「問いを見つけて」ではなく「なんとなく撮って」がポイントです。



市川さん

気づく感覚を取り戻す魔法

新井 こんなワークショップは初めて。心の向くままにシャッターを切るような経験でした。

花輪 自分が型にはまっていることに気づかされました。この高校のことからあらかた知っている、そうした知識や経験が、自由な気づきの邪魔をしますね。一方、生徒たちはとても豊かな絵を描いていて、普段なら言わないような問いをどんどん発したので驚きました。

市川 それが「なんとなく」気になるものを撮って」と言うことの魔法なんです。

す。「問い」や「違和感のあるもの」を発見して」と言うと、生徒のほうも妙なスイッチが入ってしまいます。なんとなく、とりあえず、あてもなく。この3つが、心をオープンにして、気づく感覚を取り戻すためのポイントです。

山田 以前、今回の生徒たちに「興味のあることは？」と聞いたのですが、なかなか出てこなかった。「興味」や「好きなこと」のような言葉をつかって問うと、生徒は不要に構えてしまうのかもしれない。

江川 歩き始めてから、生徒たちが戸惑っていたとき、ついサポートしてあげたくなくなりました。また、わ



市川 「何に気づいた？」と聞くより、先生自身が気づいたこと、面白いと思うことを話してみたほうがいい。「この人は自分が気づいたことを面白がっている。お互いの面白見を共有したいんだな」とわかると、不思議なもので生徒たちは勝手に動き始めるんです。

岡本 ぼーっとしているように見える生徒には、つい声をかけてしまいました

市川 今日、黙ったまま、あまりカメラを構えようとしなかった生徒さんがいましたよね。一枚くらいは撮ったのかな、と思って見ていたら、黙々と柵の絵を描いていた。よく見ると、柵の脚の一部が曲がっている。そして発表のときに「なぜこの一部だけが曲がっているのか、どこから力が加わればこんな曲がり方になるのか、不思議に

かりやすい結論に誘導してしまいそうになります。どのように接すればいいでしょう？

た。生徒たちが気づき始めるまで待つのが大事とわかっていても、なかなか待てないものです。

江川先生



やる気のなさそうな子ほど、実は勝手に「気づいて」いますよね。

ついサポートしてあげたくなるのですが……。



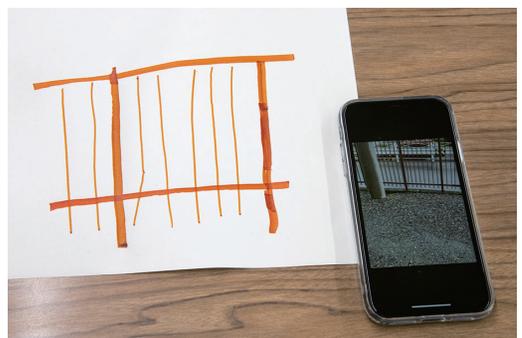
市川さん



思った」と言った。そんな面白い着眼点で観察していたのか！と驚きましたよね。黙っている子って、意外と自分のペースで世界を観察しているんですよ。こういう生徒は、自分で動き始めるまで放っておいたほうがいい。そして絵を描くことで、気づきが言葉になる。言葉が先では出てこない。

先生の発見力に触発されて学び合いが始まる

坂庭 生徒を型にはめたくないと思っ



黙って一人でいる生徒ほど、自分自身で気になるものを見つけていたようだ。「柵の一部分だけが不自然に曲がっている」と気づいた観察眼には、先生たちも驚いた。

市川 生徒たちも自分で気づくのが面倒なので、先生側の狙いや意図のよ

私自身が気づいたことを話す、あるいは「これ、すごいな！写真撮っておいてくれないか」などと一緒に面白がることで、生徒の固まった見方や思考をほぐし、感じたままを出すように促します。先生の発見力に触発されることで、馴れ合いではない対等な「学

坂庭先生



生徒が型にはまりたがることもあります。

狙いが見えると「答え」に寄せたくなるもの。



市川さん



山田先生



部活や授業にも応用できそう。
「今日の練習で気になったことは？」

絵でないとして出てこない気づきもありません。
言葉はハッシュタグ程度でも。



市川氏

「び合い」が始まるのです。

坂庭 今、生徒や学校を取り巻く環境は厳しくて「そう簡単に進学や就職ができない」なんて言葉を聞くことも多いです。些細なことを面白がろうと思っても「それが何になるの?」「それよりあなたは何を？」

「就職できるの?」と問われる環境では「ただ気づく」ことができなくなってしまう。私は新聞を活用した教育にも力を入れているのですが、例えばたくさんさんの新聞記事から「あなたが、なんとなく、気になるものは?」と問いかけてみると、教師側の意図を付度するこ

となく、自由に気づけるかもしれないと思えました。

市川 いいですね! 最初はどれも小さな気づき。それでも素直に反応することを通じていくと、面白い発見や学びが向こうからやってくる。先生も生徒も、自分をさらけ出すことを恐れなければ大丈夫。

山田 こうした「気づき」を、ワークショップの外でも継続してほしいです。部活動でも「今日の練習で、なんとなく、気になったことは?」と聞いて書きせるなど、応用できそうですが…。
市川 部活で活用するのもいいですね。ただし、いきなりちゃんとした文章を書かせようとすると、出てこない。簡単な絵を描いて、と言うと、言葉では出てこない気づきが出てきます。言葉はひと言添える、ハッシュタグ程度でもいいでしょう。



「雑」を集めることで
探究が勝手に始まる

岡本 今日のような「Feely度Walk」の体験はやりっぱなしではないのでしょうか。例えば、出てきた気づきを進路に結びつけては?

岡本先生



体験がやりっぱなしになってしまつて、進路に結びつけたほうがいい?

あえて「オチ」をつけないほうが続いていく。



市川さん

市川 私は、安易に進路には結びつけないほうがいいと思います。そうすると進路につながる範囲、例えば「文系か理系か」といった小さな範囲の中で考えられる気づきを収集しようとするからです。それよりも「一体何を得られたんだろう?」「くらいのモヤモヤを残しながら、あえてオチをつけずに終えるほうがいい。「Feely度Walk」はラジオ体操のようなもので、気づくという思考の「身体性」を鍛えるための習慣づくりなのです。気づいたこと一つひとつは「雑」にすぎない。でも、その「雑」を一定量集めて、ひたすら記録していくことで、飛び石つたに興味のストリーが広がり、あることと、別のことが、思わぬつながり方を生む。「表面的には違っても2つの構造は共通している」なんて、調べ学習レベルでは終わらない深い探究が、勝手に始まってしまうのです。



岡本先生



「経験資産」が求められる時代、
本当に宝になるのは「自ら気づいた経験」。

プロジェクト型の学習もどんどん増える。
見えないなりゆきを追いかけられるか。



市川さん

岡本 なるほど…。これからは経験が

資産になる時代、という話を聞いたことがあるのですが、あくまでも「自身で気づいた経験」が財産になるのだと感じました。

市川 最近プロジェクト型の学習もどんどん増えていますよね。決まった答えを目指すわけではないので、自然と紆余曲折が起こります。そのときに頼りになるのは、自分の「なんとなくこっちかも」といった感覚を信じて、見えないなりゆきを進む力ではないでしょうか。

小さな発見を信じる力

山田 今日写真を選ぶだけで、生徒たちは大いに悩んでいました。でも「自分がなんとなく納得できるものを1枚選ぶ」だけで、思考のトレーニングになりますよね。

新井 作文も、本来は「なんとなく思う

たこと、気づいたことを言語化する

ものだと思うのです。なんとなく選ぶものについて観察して、自分の言葉で説明するというのは、「気づき、考えること」そのもののトレーニングになりそう。同じくなんとなくでも、スマホを見てなんとなく日々が過ぎていくのとは少し違うモードに変わる。「Feed 1度Walk」は、気づきの千本ノックのようですね。

市川 そのとおりです。生徒たちは

「すごく好き」と言えるほどではないと、好きとか、面白そうとか、言っていない」と萎縮しています。「Feed 1度Walk」で発表するときの、生徒たちの自信に満ちた表情は「私にも見つけられた」心の叫びだと思えます。客観的にもものを見る観察力と、自分のなんとなくを信じられる感性や自信。その両輪があつてこそ、その場で没入し、気づき、考えることができるはずですよ。

新井先生



まるで「気づき、考えること」の千本ノックのよう。
探究活動を支える力になる。

客観的に観察する力と、自分の感じたことを
信じられる力、両輪が必要ですね。



市川さん



言語化できなくても
気づいている



Wakura

体験学習というと「特別なことをやらなければ」と、つい気負ってしまいがちです。さらに活動後生徒たちが気づきを言語化できないと「何も感じていない、考えていないのでは」と評価しかねません。でも本当はそんなことはないのです。「Feed 1度Walk」では、正解やほかの人との比較にとらわれない「小さな発見」は、どこでも、どんな体験からでもできるのだと生徒たちに気づかせます。そして小さな発見を通じて自信をもたせ、生徒の自由な感受性を伸ばすのです。今気づいた発見、その一つから直線的に学習につなげるのではなく、ひたすら「雑」をアーカイブし、量を貯めることで、新たな学びとなる抽象的な気づき・問いへと、自ずとつながっていくことを狙っている。だからこそ、この「気づきの筋トレ」の継続は、探究活動の基礎になるのです。社会に出てからも、こうした小さな気づきを見逃さず、日常的に集めている人が、新たなアイデアを生み出していくはずですよ。